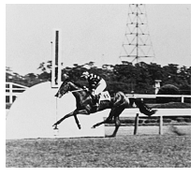
ムカシの競馬を読む



須田鷹雄（すだ たかお）
1970年東京生まれ。競馬ライター。サラブレ、大阪日刊スポーツなど各種媒体に寄稿中。

第138回 10年・20年・30年前の3月

いまから10年前、平成19年の3月というと、G1では高松宮記念をスズカフェニックスが勝った月。他にはウオッカがチューリップ賞を勝つなどしており、売り上げは減少していたものの、中央競馬はそれまでと同様の賑わいを見せていた。

その一方で、地方競馬が最低迷期を迎えていたのがこの頃である。ばんえい競馬は廃止の際まで行き、ソフトバンクグループの支援を受けて存続が決まったものの、新体制作りが遅れていた。そして、本当に廃止の1歩手前、議会における1票差まで行ったのが岩手競馬である。まず、3月16日付の読売新聞から引用しよう。同紙は「岩手競馬今年度で廃止」との見出しから、以下のような記事を掲載していた。

「岩手県の増田寛也知事は16日未明、県庁で記者会見し、県と盛岡、奥州両市が共同運営している岩手競馬を今年度限りで廃止する方針を明らかにした」

この前日、岩手県議会には岩手県競馬組合などに県が297億円を融資する平成18年度補正予算案が提出されていたのだが、賛否同数に。採決に加わらない議長が反対に回ったため否決となり、存続が手詰まりとなったのである。

しかしその後、存続に前向きだった奥州市と盛岡市が各10億円を追加負担する、つまり県の負担が20億円減るプランを提出。岩手県議会には再度補正予算案が提出されることとなった。そして結果だが、3月20日付の報知新聞から引用しよう。

「岩手県議会は19日夜の臨時議会の本会議で、岩手競馬存続のため超党派の議員が提出した岩手県競馬組合への融資を20億円減額し277億5000万円とする補正予算案修正案を1票差で可決した」

この1票差可決は有名な話なのだが、実は本来は2票差で可決できるはずだった。岩手県知事選に立候補表明していたザ・グレート・サスケ岩手県議（プロレスラー）が修正案の議決前に辞職願を提出。「存続派」が1人減っていたのだ。

なぜギリギリの採決前に存続派だったはずのサスケが辞職したのかは謎なのだが、ここで流れを読めなかったことは後の知事選落選→県議選落選へとつながっていく。

とにかく存廃の話ばかりだった10年前の地方競馬界だが、そこまで困窮していなかった園田競馬場では、こんな脱力系の「事件」も起きていた。3月8日付のスポニチから引用しよう。

「兵庫県尼崎市の園田競馬場で昨年12月6日のレースで1着になりながら、尿から禁止薬物のカフェインが検出され失格になった競走馬ロゴス（牡6歳）の尿に、人間の尿が混じっていたことが7日、分かった。レース後に尿を検査した男性が『規定量の採取に失敗し、自分の尿を混入した』と供述。兵庫県警はこの男性をきょう8日にも競馬法違反で書類送検する」

採尿は出ないときは延々出ないものなので気持ちとして分からないではないが、さすがにトホホという感じだ。

しかも記事によると、問題の男性は採尿の3時間前に昼食をとった際にお茶を飲んでいたとのことで、そのカフェインが検出されたようだ。

いい迷惑なのはロゴス号と関係者。これが発覚する前には着順と賞金が取り消されていたが、晴れて無実の身となり、賞金も再交付されたそうである。ただ、NARのサイトで確認すると、当該レースの結果は「失格」のままで、2位入線馬が1着となっている。また、連闘で使うはずだった競馬を取り消した形跡もあり、人間の尿混入の影響は大きかったようだ。

園田の件は悪意というよりアホな話とカテゴライズできるが、その頃香港では、悪意に満ちた不正が発覚していた。3月23日付の日刊スポーツから引用する。

「香港のハッピーバレー競馬場で21日、12本の金属管が芝生のコースに埋められているのが見つかった。ロイター通信によると、金属管には毒性があると見られる化学薬品を含んだ針が詰められていた。競走馬に向かって遠隔操作で針を発射できるようになっており、警察は何者かがレースを妨害しようとして設置したとみて捜査している」

記事によると、装置には発射に使うと見られる圧縮ガスの入った缶や電波の受信装置も含まれているとのこと。レースそのものを破壊するテロ行為だったのか、特定の馬を狙った不正行為だったのかは定かでないが、過去に発覚した不正行為の中でも最も手の込んだものひとつだろう。未遂に終わったのはなによりだった。

続いていまから20年前、平成9年の3月から。3月は新規騎手・調教師のデビューがあり、ニュースもそれにまつわるものが多い。その中でも、これは皆さんの記憶に強く残っているのではないだろうか。平成9年3月3日付のスポニチから。

「阪神競馬場で行われた第28回マイラーズCは武幸四郎が制した。デビュー週の新人騎手が重賞初挑戦で勝利したのはJRA史上初の快挙。これには並み居るベテラン、中堅ジョッキーは口をあんぐり。レース後の検量室では松永幹騎手らが祝福の握手をさしのべたが、ベテラン騎手たちも幸四郎の大物ぶりには脱帽の様子だ」

今年騎手を引退し調教師となる武幸四郎騎手は、このマイラーズCが初勝利。土曜に8鞍、日曜に6鞍乗ってその計14鞍目がこのマイラーズカップだった。

新人騎手はG1に乗れないので「初勝利がG2」というのは理論上、最もレース格の高い初勝利。スポーツ紙は盛り上がり、このスポニチも直後の火曜に高知で指定交流競走に騎乗する武幸四郎騎手について「さあ高知でも大暴れ」の見出しをつけて煽った。ただこの高知遠征で、武幸四郎騎手はスタート直後の落馬で競走中止という結果に見舞われてしまう。やはり新人騎手がなにからなにまで順調なスタートを切るというのは難しいものなのか。

さらにそこから10年遡って昭和62年3月ということになると、これは兄の武豊騎手がデビューした月ということになる。

当時どれくらい話題になっていたかというと……もちろん武邦彦調教師（ちなみにこの月に開業）の息子なので話題になっていた。雑誌フライデーの3月13日号に、父は調教師として、息子は騎手としてデビューするという写真付き記事が掲載されていたりもする。

しかし武豊騎手が後に競馬の歴史を塗り替えると分かっていた人はいないわけで、デビュー週の記事はものすごく地味だ。デビュー週に勝てなかった（3月1日の日曜にデビュー、デビュー2日目となる翌週土曜日に初勝利）せいもあるだろう。

たとえば3月2日付のサンスポだと、「さすが名人二世、初陣を2着」と見出しをつけているものの、「初勝利成らず～1日は東西で新人ジョッキーがそれぞれデビュー」したが、関西では元騎手・武邦彦調教師の三男・豊騎手が4鞍に乗り2，5，8，5着に終わるなど初Vはおあずけとなった」

程度の扱いで、あとは兄弟子の河内洋騎手がその騎乗ぶりを誉めるコメントが掲載されている程度である。

ただこれは関東の紙面をもとにしたものなので、関西版は各紙もう少し大きい扱いだったかもしれない。関東版は「長峰大健闘2着」のほうが大きい記事になっていたりする。東西の競馬がほぼ分離されていた当時らしい話だ。

平成19年・中京競馬場
高松宮記念
優勝馬：スズカフェニックス

© JRA